

審査結果の要旨

報告番号	乙 第 3030 号	氏名	加来 秀彰
審査担当者	主査	萩原 純	(印)
	副主査	いり口 巧	(印)
	副主査	ス下 亨	(印)
主論文題目： Significance of Intraperitoneal-free <i>KRT20</i> and <i>CEACAM6</i> mRNA Expression for Peritoneal Recurrence of Gastric Cancer (胃癌腹膜播種再発に対する腹腔内遊離 <i>KRT-20</i> , <i>CEACAM6</i> mRNA 発現の重要性)			

審査結果の要旨 (意見)

胃癌の微細な腹膜播種の評価に術中洗浄腹水細胞診が広く用いられているが、術中洗浄細胞診陰性の症例でも腹膜再発をきたすことが知られている。その原因の一つとして細胞診診断の限界が考えられる。術中洗浄腹水細胞診では、往々にして出現する腫瘍細胞が少ないため確定診断が困難な場合がある。本検討では、胃切除術を受けた患者 58 名の術前・術後の腹腔洗浄液から RNA を抽出し、*KRT20* および *CEACAM6* の発現を RT-PCR で検討した。*KRT20* の発現は、腫瘍の漿膜下への浸潤 (T3) または漿膜への浸潤 (T4a)、リンパ節転移、術中出血 150ml 以上と有意に相関していた。また、腹膜再発をきたした症例は全例で、*CEACAM6* が陽性であった。さらに腹膜再発に対する多変量解析の結果、*CEACAM6* の発現のオッズ比は 24.753 と極めて高い値を示した。腹膜再発の予後は、*KRT20* 陽性例、*CEACAM6* 陽性例ともに、*KRT20* 陰性、*CEACAM6* 陰性の症例より有意に不良であった。*KRT20* および *CEACAM6* 腹膜再発の予測因子としての有用性を示す検討である。今後の臨床応用に向けた基礎的なデータであり、学位論文と相応しいと論文である。

論文要旨

腹腔洗浄細胞診は、手術後の腹膜再発を予測するために広く使用されているが、根治手術 (R0) かつ腹腔洗浄細胞診陰性 (CY0) の患者で腹膜再発の症例をしばしば経験する。胃癌手術の前後の腹腔洗浄液を使用して、RT-PCR により *KRT20* および *CEACAM6* mRNA を検出した。

胃切除術を受けた 58 人の患者から手術前後の腹腔洗浄液を採取、RNA を抽出し、RT-PCR を行い、mRNA 発現と臨床病理学および外科的要因および予後との関係を調査した。

漿膜下への腫瘍浸潤 (T3) または漿膜への浸潤 (T4a)、リンパ節転移、および 150 ml を超える術中出血は、*KRT20* mRNA 発現と有意に相関していた。腹膜再発に関わる多変量解析では、*CEACAM6* mRNA が最もオッズ比が高いことが示された (24.753 (0.883-694.06) $p=0.0592$)。腹膜再発を伴うすべての症例は、手術前または手術後に *CEACAM6* 陽性で、*KRT20* および *CEACAM6* 陽性症例の腹膜再発の予後は、他の症例よりも有意に不良であった。*CEACAM6* 陽性群の無再発生存率は、*CEACAM6* 陰性群よりも有意に悪かった。

手術前および手術後の腹腔洗浄液からの *CEACAM6* mRNA の測定は、腹膜再発の予測因子として有用である可能性がある。